
復讐するモノ

鶴橋ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

復讐するモノ

【Nコード】

N0847C

【作者名】

鶴橋ユウ

【あらすじ】

ガイの過去話。自分を庇い死してく人々。衝撃すぎる現実に記憶を手放す。そして次に目にしたモノは…。ガイが復讐を誓うまでのストーリーになっています。

(前書き)

本編はテイルズ・オブジ・アビスというゲームを元に創った話です。

ガイが黒いです。

そして、話し全体的に暗いので、苦手な方にはお勧め出来ません＞

m (m <

赤い

紅い…

視界に赤黒いものがこびり付いている。
口の中が酷く鉄の味がして、むせ返りそうだ。

ああ…

やっぱり何処を視ても

世界が赤い…

「ガイラルディア様!？」

声が聴こえる。叫びにも似た声で俺を呼ぶ。
焦点が合った。ペールが酷く安堵した表情を浮かべているのが分かった。

「ここ…は…何処？」

辛そうに顔を歪めたのが見えた。
辺りは一面の焼け野原。やけに瓦礫が転がっている。
ぼんやりと、働かない頭を動かした。

「ここは何処？皆は…何処にいったの…？」

ここは何処だ？

やけに静かすぎる空間の中…何故、俺は此処に立っているのだろう…。

声が聞こえない。

誰も居ない…。

ナゼ…？

「みんなは何処に…。」

「みな殺されました。」

低い声が脳を刺激する。目を見開き、声を発した人物に向けて、跳ねるように頭を上げた。いつの間にか…いや、初めからいたのかも…しれない…。ウゝァンデスデルカが視界を塞ぐ様に立っていた。

ああ…やけに血の味が醜く拡がる。

「うそ…だ…。」

あまりにも衝撃すぎる現実。

受け入れられない
受け入れたくない

「嘘ではありません。」

拒絶する事を赦さない様に、現実を押し付けるかの様に、ウァンデスデルカは静かに口を開いた。

「うそ…だ…。ウソだ…！？嘘だ嘘だ嘘だ！！？！」

声は叫びへと変わり、静かすぎる空間。拒絶する叫びが壊れた機械の如く、同じ言葉を繰り返す。

ジャリー…

気付かぬ内に力を込めていた掌に、結晶と成した血の塊が、音を立てて砕けた。

無意識に手の内へと視線を落とす。ぼんやりとそれを眺めていた脳が、一つの疑問を浮かび上がらせた。

コノ血は誰のモノ…？

傷を負ってない筈の俺の手が、何故血で汚れている…？

「なん…で、みんな赤いの…？」

よく見てみると、パールもウァンデスデルカも全身血塗れだ。

「覚えて…いらっしやらないのですか…？」

ペールが悲しそうに眉をひそめて、顔を逸らした。

何が起こった？

何で誰も居ない？

何故…世界がこんなにも紅い…？

何も分からず、視界が定まらない俺をあやす様、耳元で囁く。

「戦争が起こったのです。」

「…戦争…？」

「そう…キムラスカとの間で戦争が。」

ぼんやりと、オウムの様に呟き返す俺に向かって、抑揚の無い声で続ける。

「そして、貴方様を庇うようにしてお姉様は…」

「ウゝァンデスデルカ！?!？」

強く、静止をかけるペールの声。何をそんなに怒っているのだろうか…？見たことの無いほど目を吊り上げ、険しい表情をしている。だが、ウゝァンデスデルカはそんな事を気にも止めてないのか、話しを続ける。

「マリィ様は貴方様を庇って

死にました。」

アア…世界が紅イ…

身動きが取れない。

叫ぶ事も悲しむ事も涙を流す事さえも…

何も行動出来ない…。

只、ウゝァンデスデルカの声だけが、遠い所で呟いているように聞こえるだけだった。

「マリイ様だけではありません。伯爵や奥方様は先に殺され、メイド達も皆貴方様を庇って死にました。

今のところ、私とペールと…ガイラルディア様の三人しか生き残りを見ておりません。

ホドはー…滅んだのです。」

「…うそ…だ…。」

やっと出た喉の底から絞り出した拒絶の言葉。

だが…いくら否定しても、目の前に広がる瓦礫の山が、人を燃やした時に漂い、胸焼けで吐き気がする程の臭いが、日常とはかけ離れた静寂すぎるこの音が、全ての五感が現実だと、叫びを上げている。

滅んだ…

美しかったあの故郷が…

皆殺された

ダレのセイで…？

言い様の無い憎しみが、ぶつけ様の無い哀しみが、漠然とした怒りが…心をさ迷う。

「憎…い…。」

この負の感情をどうすればいい？行き場を失ったこのドス黒い感情を、どうすれば…。

「ならば…復讐をされては如何ですか？」

「フク…シュウ…？」

悪魔の様な囁き。復讐とゆう単語が脳裏に焼き付く。何故かその言葉が心地よい。

表情亡く、ウ、ァンデスデルカへと顔を向ける。

笑顔で、だが目は笑っていない。口の端をユルリと上げ、何かを企んでいるような…光無き瞳が俺を映し出す。

「私は貴方様の…ガルディオス伯爵夫人に手をかけた物を知っております。キムラスカの貴族、ファブレ公爵。そして、その家には跡取り息子が一人います。名を『ルーク』。」

「ルーク…。」

「そうです。その憎き息子に取り入り、公爵の目の前で、愛すべき息子を最も残酷な殺し方で葬り去るのです。

…貴方様の手で。」

膝をつき頭を垂れ、目の前に手を差し伸べる。

「共に復讐を誓おうではありませんか。」

相変わらず濁った瞳を俺に向ける。俺とは何処か違う、遠い未来を見透しているかのように…。

ああ、ウゝアンデスデルカよ。お前は何かの企みに俺を利用しようというのか。

何かは知らぬ。

だが…その企みに乗ってやろう。

手に自らの手を重ね、誓いの言葉を連ねる。

「一族の悲願を叶える為…ここに復讐を誓う。」

感情無く吐き出された言葉。

満足そうに笑うウゝアンデスデルカが、悲しそうに顔を歪め、目を背けながらも、

「ガイラルディア様、貴方様が望むのなら…。」

と忠誠を誓ったペールの表情が、網膜に焼き付いたが、それすらどうでも良かった。

醜く口の端を吊り上げ、汚れた様に顔を歪めほくそ笑む。

血で血を洗うこの復讐劇、踊り狂うまで付き合って貰おうか。

「初めまして。今日から貴方様の付き人に命じられた、ガイ・セシ

ルと申します。

宜しくお願い致します。

：『ルーク』様。」

愛想笑いを張り付け、復讐心を抱きながら、憎き息子の名を呼び掛けた。それは

「ああ…。」と、子供らしさとはかけ離れた返事を返す。

風に揺らめく王族の証、血の如く鮮血の赤き髪。肩を垂れ、動めく度になびく様は、俺の心の奥底にある憎悪を掻き立てる。

焼き付く様な純粹な緋。

赤は復讐の色。

鮮明にあの日の記憶を思い返せる。

赤い

紅い：

世界があかい

お前の世界も

俺が緋く染め上げてあげよう

さあ、采は投げられたのだ

(後書き)

最後までお付き合い頂き有難うございますm (_) m

大変な事に気付いたんですが……ゲーム本編との大きな矛盾を大量に発掘しました（苦笑

大きな矛盾はウーテンとガイの出逢う時期と、ルークとの初会話で
すかね…。

ウ・アンはホドと共にクリフォートに落ちた筈だし、ガイが使用人として雇われた時のルークの年を逆算してみると：

3歳…?

『子供らしさとはかけ離れた返事を返す』って、自分：幼児じゃない！！ただけ可愛らしさの欠片も無く育った子どもですか！（混乱中）

はあはあ…

∴ 取り乱してすみません m
〔 m

と、取り敢えず（汗

その部分を修正すると連載中の続編、『復讐者の末路』がとんでも無いことになりますので、このまま進ませて貰います（汗

※
My
設定

ウ・アンはガイ達と会話した後、一人島に残る。その時マルクト軍に捕まり島と共にクリフォトに落ちます。ガイは始めルークとの関わりの無い仕事だったが、途中からルークの世話役に任命された。

(ルーク7・8才)

作者の勉強不足で全体的に矛盾尽くしになってしまい申し訳ないです。

他にも矛盾等がありましたら報告お願いします。

感想・評価の方も宜しくお願い致します>m
(
m<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0847c/>

復讐するモノ

2010年10月20日18時44分発行